

文化とパーソナリティー論の一原点

——ルース・ベネディクトの

文化研究について——

市川 孝 一

はじめに

ここ数年来の日本人論、日本文化論のブームによる再評価をまつまでもなく、『菊と刀』の著者としてのルース・ベネディクトは、よく知られたところである。しかし、その著作のいけば方法論的基礎となった『文化の型』(Patterns of Culture)⁽¹⁾については、比較的わずかの注目しか払われていない。

本稿の目的は、主にこの『文化の型』で論じられたベネディクトの文化研究に、いわゆる文化とパーソナリティー論の観点から光を当て、そこに含まれる問題点のいくつかを指摘することである。

一 文化の研究の前提

自らの属する文化を客観的な目を持って見ることは、いつの時代にあっても極めて困難なことである。しかし、それ以前に、

それに劣らぬ困難が、文化を研究の対象とすること自体のうちにもあったのである。

この文化の科学的研究を妨げていた要因を指摘した『啓蒙的』役割と、その批判の上に新らたな文化研究の方向をひらいたことが、ベネディクトの第一の功績である。

ベネディクトによれば、『慣習』(custom)の科学たる文化の研究を妨げていたこの要因とは、次の二つである。一つは、それが、あまりにも身近なものであるが故にその存在にすら注意が払われなかった点。つまり、それは「まさに自分達の思考の道具そのもの」⁽²⁾であったために社会理論家の注意をひくに至らなかったものであり、根本的なものであっただけに、その存在が意識のしきいの外にあったのである。

第二の要因は、およそ科学的研究と呼ばれるものの初歩的原則にも反する、傲慢さの混じった先入観と偏見による盲目性である。ただ人間自身の研究の場合に限って、社会科学の諸分野は、「一つの地域的変種にすぎない西洋文明の研究をもって人類全体のそれにかえてきた」⁽³⁾のであり、それは、「自分達自身の局地的なものにすぎぬ行動様式を人間行動そのものと混同し、自分達自身が社会的に認めている習慣を人間性一般と同一視しよう」⁽⁴⁾という試みに他ならない。人類学は、これに対し自分達の社会以外の社会、どんな文化をも同じレベルで研究の対象とするものである。何故なら文化を論ずる際の不可欠の前提条件は、その議論が広くあらゆる文化の諸形態に関する知識に立脚していることであり、その時はじめて、我々は、人間の適応のうち、

文化的に条件づけられたもの(特殊なもの)と、人間一般に共通であり必然的なもの(普遍的なもの)とを区別することができるからである。この徹底した相対主義の立場が、ベネディクトの文化把握の一つの基礎である。

二 生きた文化の研究

このような相対主義の立場に立つて、ベネディクトがとらえようとした文化とはいかなるものであったのか。それは、何よりもまず『生きた文化』でなければならなかった。これは、フースト・ハンドの知識に基づかず間接的な知識に依拠した従来のいわゆるアーム・チェア派の『死体解剖的文化研究』に対する批判であり、生きて現実に機能している文化の姿をとらえることを主張した機能主義の立場とその批判的見解を共にする。

さらに、やや視点をかえて見た時、この『生きた文化』の研究の主張は、従来の歴史学派内部における進化論と伝播論という古典的対立を包括的に統一し、機能主義の集中的分析というアプローチをも一つの刺激として受け入れたボアズの直弟子としてのベネディクトの文化人類学史上の位置を端的に語っているものとみることができよう。

重要なのは、ベネディクトが、文化人類学の発展の流れの中の一つの結節点、新たな動向を示す転換点にあったということとであり、この特異な位置が、後にふれる文化とパーソナリティー論の一人の先駆者としてのベネディクトを可能にした要因

の一つであったように思われる。

三 文化の多様性と統一性

先に述べた文化相対主義の立場と相互補完的なものが、文化の多様性への注目である。あらゆる文化に同じウエイトを置いて見ることのできる相対主義の寛容の目にのみ、文化の多様性は浮び上ってくるのであり、逆にこの多様性を認めることが相対主義の立場に他ならないからである。

言語が、ほとんど限らない音声のなかから、あるものを選択し、その組合わせによって種々の異なった言語の存在が可能であるのと同様に、文化も、人間のあらゆる可能性の円弧のなかから、その一部が選択されたものであり、そこにはさまざまな形態が可能である。そして、そのようにして成立したある文化の「個別文化としての独自性」は、文化要素の可能性の円弧の一組の切片の選択によって生まれる」とされる。

それでは、この選択とは何なのか、何故なされるのか——いわば、その際の異なった『選択原理』というべきものは、何故に生じ、何によって担われるのか——この問いは、後の『統合原理』の個所の論点と重なるのだが、ある種の曖昧さのうちに解消されてしまう。

文化の多様性の承認は、さらに次のような文化把握と相補的である。つまり、各々の文化は、何らかのまとまりをもった独自のものとして存在するという発想とである。ベネディクトによれば、個別文化とは、「ちょうど個人がそうであるように、

多かれ少なかれ首尾一貫した思想や行動の型⁽⁶⁾としてとらえられている。文化は、単なる諸特性の集計ではなく、それ以上のものであり、何らかの統一性をもった「全体として」とらえなければならぬものである。

この文化を全体として独自の形態をもった「統合体⁽⁷⁾」としてとらえるところに、ベネディクトの文化把握のユニークさがあり、これが、その主張のエッセンスでもある。この文化把握をささえるものは、右の文化の規定に明らかなように、文化もパーソナリティーと同様にある種の心理的な一貫性を持ったものであるという見方である。両者は、いわば同種異型⁽⁸⁾なものとしてとらえられているといえる。

この文化の統合に関しては、「文化の意図⁽⁹⁾」とか「文化の目標⁽¹⁰⁾」といったことが頻出し、個別文化は、その文化の意図や目標に従って文化の諸特性をある一定の方向にまとめあげるものとされる。別の表現では、各々の文化は、特定のライト・モチーフ⁽¹¹⁾に貫かれ、全体としてある方向性をもった独自の個別世界として成立するというのである。

ここでの統合過程に関する説明を見る限り、文化は個人を離れた歴史的個性的実在としてとらえられ、いわば文化それ自体の論理が求められているかにみえる。ここに人間の入り込む余地はなさそうかの印象を与える。

四 文化の全体性

文化の全体性への注目、先にふれたアームチェアー派に対

する批判のもう一つの側面であり、ここでも機能主義とその批判的立場を分ち持つ。つまり、文化的諸特性の個別的分析にはかり専念した従来の研究を批判し、どんな文化の特性でも、その置かれた一般的状況から切り離しては理解できず、それらが「独自の統合にどのように組み込まれているか」を見る⁽⁹⁾ことが重要であり、この統合こそが、個々の文化諸特性に形式と意味を与えるものであることが主張される。

しかし、同じく文化の全体性への注目といっても、機能主義が、文化という生きた活動体の中で個々の文化諸特性が、いかに機能しているかをとらえようとしたの⁽¹⁰⁾に対し、ベネディクトは、それらの機能が、一つの個別文化の中にいかに統合⁽¹⁰⁾されているかということ、及びその個別文化が統合体として形づくっているところの独自の世界⁽¹¹⁾の解明にウェイトを置いたのである。

この文化の全体性への注目を、ベネディクトは、「各部分の分析に対して、全体としての統合体の研究の重要性を強調する⁽¹²⁾」当時の科学の諸領域での一般的動向に沿うものとして位置づけている。そして、ここで、その傾向を示す例としてベネディクトによってあげられているものは、彼女の文化のとらえ方がどのようなものにその発想の基礎をもっているのかを知る上で重要である。ここで、我々は、いわばその思想的背景を知ることができるのである。

第一のそれは、W・スタインであり、彼は哲学と心理学の分野に右の考えを取り入れた。つまり、彼は、従来の原子論的研

究を批判し、パーソナリティーの統合^{ユナイティング}体の研究を主張したのである。そして、ここに先に引用したベネディクトの文化の規定との直接の対応関係を見ることは困難ではない。

第二は、ウォリナーであり、同様の考えを美学の面に適応した。そこでは、二つの異なった芸術様式は、異なった芸術意図によって成立した別個の統合体としてとらえられており、ベネディクトが、文化の統合の説明の際に芸術様式の成立過程とのアナロジーを用いたのは、まさにこれによる。

第三のそれは、ゲシュタルト心理学である。ベネディクト自身の評価と実際の記述を見る限り、彼女の文化のとらえ方にゲシュタルト心理学が与えた影響は、かなり大きいものとみていいと思われる。少なくとも、その発想が、ゲシュタルト心理学的であることは否定すべくもない。⁽¹¹⁾

第四は、W・ディルタイである。ベネディクトは、彼の「世界観の諸類型」に述べられている哲学的諸体系の相対的把握の主張のなかに、文化をとらえる際の自己の相対主義の立場のまさに哲学的裏付けを見出したのである。

最後のそれは、O・シュペンギーラーの『西欧の没落』である。ベネディクトは、この著作の主張のうちの「西洋文明の対照的な諸統合体の分析」という側面に、彼の価値ある獨創性を見出すのである。つまり、彼が、対照的な二つの偉大な運命観として、アポロ的観念とファウスト的観念とを区別したこの方をより評価するのである。

何故なら、ベネディクトの注目は、この対比の「生の正反対

の解釈」である点に向けられ、『文化の型』において、プエブロ文化のアポロ性と、クワキウトルのディオニソス性を明らかにした視点は、まさにこれに重なり合うからである。つまり、三つの具体的文化の分析において強調された側面は、まさに彼らの生の解釈・人生観・世界観(宇宙観)・エートスだったからである。⁽¹²⁾

五 文化の中の人間と人間の中の文化

前節では、ベネディクトの文化の議論における、世界観学的性格の側面が強調されすぎた。しかし、これはあくまで一面にすぎない。

それ以上に重要なのは、ベネディクトの文化の議論のうちにある文化と個人、文化の中の個人という視点である。これは、文化の議論の中への人間の要素の導入と、文化とは人間にとって何か、という問いに収束する。

人間が、文化に規定される存在であるという限りで、ベネディクトは、一つの文化決定論の立場である。しかし、全ての人間が、文化によって文字を書き込まれる白紙ではない。その属する文化にある種の「居心地の悪さ」を感じる人間は常に少なからず存在するものである。自分は、今の時代のアメリカよりも、他の時代、他の文化により適しているのではないか——アイデンティティー探究の過程で、この疑念にぶつかったベネディクトにとってこの文化と個人の問題は、まさに重大な課題たらざるを得なかった。⁽¹³⁾

同時に、この疑念は、新たな発想をもたらした。個々の文化は、その文化の成員のパーソナリティーの反映ではないか——人間の諸文化を『大きく書かれたパーソナリティ(Personality writ large)』⁽¹⁴⁾とするとらえ方をである。明らかに、ここに視点の逆転が見られる。これにより、心理的特性(パーソナリティー特性)と文化との間の橋、わたしの、さらには、文化とパーソナリティーという交互作用の研究の方向がひらかれた。この、いわば文化の中の人間から、人間の中の文化への視点の逆転により、ベネディクトの文化の議論は、文化とパーソナリティー論の一つの原点となりえたのである。

六 今後の課題に向けて

『文化の型』の出版を「一事件と呼ぶにふさわしいほどの意義をもっていた」⁽¹⁵⁾と評するものもあるほどで、本書が、一つのエポック・メイキングな意義をもつことは、まず間違いない。

M・ミードは、本書の意義を次の三点にまとめている。⁽¹⁶⁾一つは、文化の比較研究の端緒となった点。つまり、種々の文化から恣意的に収集した文化諸特性の単なる比較という従来の文化研究に代り、独自の統合体としての個別文化の間の比較を試みた点。第二は、自己の内面に深くかかわる問題の追求の過程で、文化の中の個人に注目し、異常や逸脱の問題に新たな視点をひらいた点。第三は、未開社会の文化を扱いながらも、世界、あるいは人類全体につながる課題を追求している点。つまり、

文化の理解により人間は未来に対してより大きな制御力を持つことができるという健全な信念に基づき、非合理的な偏見の克服を可能にする『真に文化意識のある人間』の重要性を説いた点である。

以上は、一つの肯定的全体評価であり、主要な論的はほぼこれに尽きる。ここでは、これに、一、二の批判的見解を補足したい。

一つは、具体的な研究方法を含む広い意味での方法論的側面に関してである。三つの具体的文化の記述に明らかのように、ここではいわゆる民族誌的データを総合し、そこに一つの文化の型を求めようという方法、つまり、諸個人の心理的特性の調査とその集積から文化の特徴をひき出すというよりも、むしろ社会制度や集団規範の側から文化の型を構成するという方法がとられている。ことをかえていえば「社会心理をつかむことからはじめて、個人心理を類推する下降的方法」だといってもよい。批判は、この方法に対しその科学的厳密性の欠如に向けられる。つまり、ここでとられたのは、科学的実証の手続きよりも、いわば詩人的直観によるもので、そこでとらえられた文化の姿は、その限りでベネディクト自身のものであったというのである。⁽¹⁸⁾

次は、ベネディクトのいう『文化』の曖昧さである。明確な定義はなく、先にふれた規定的記述から、我々は、その文化の、とらえ方を知るのみである。ただ、文化の研究において、最も重要な分析単位は統合体であるという主張や、具体的文

化の記述を見る限り、よく知られた E・B・タイラーの文化の定義⁽¹⁹⁾のように、極めて包括的なものが想定されていることは確かである。つまり、ベネディクトにあっては、シュビロが区別している文化実在論と文化唯名論の立場は、⁽²⁰⁾いとも容易に折衷されてしまっているのである。

最後に、文化とパーソナリティー論の大きな流れの中へのベネディクトの位置づけという問題が残った。これに関しては、リンデスミスとストラウスが、『文化の統合体と連関したパーソナリティー型の記述にウェイトを置くアプローチ』の代表とし、浜口が、『全体論的接近法』と呼ぶものの一つに位置づけたものなどがある。さらに、これに加え、ネオ・フロイディアン⁽²¹⁾の文化研究や、ウォレスらのいわゆる『新文化とパーソナリティー学派』⁽²²⁾らとの関係、あるいは精神分析学の影響とベネディクト……等々といった興味ある論点が、なお多く残っているのだが、紙数も尽き、いずれも今後の課題としなければならぬ。ともかくも、ベネディクトの文化の議論にみられる、やや混乱した印象の一部は、あるいは、文化とパーソナリティーの領域に固有かつ不可避の循環的性格⁽²³⁾に由来するものかもしれない。しかし、文化とパーソナリティー論に内在するこの本質故に、それは、限らない興味をひきおこしてやまぬ課題となり得るのである。

(1) Ruth Benedict, *Patterns of Culture*, Houghton Mifflin Co., 1934 (米山俊直訳『文化の型』社会思想社 一九七三年) なお引用文のページ数は、Sentry Edition(Twenty-

second Printing) による。

(2) *ibid.*, p. 9 傍点引用者。

(3) *ibid.*, p. 3

(4) *ibid.*, p. 7

(5) *ibid.*, p. 24 傍点引用者。

(6) *ibid.*, p. 46 ベネディクトが、『文化』を規定した数少ない記述の一つである。

(7) 例えば、*ibid.*, p. 59 等。

(8) Ruth Benedict, "Configuration of Culture in North America", *American Anthropologist*, Vol. XXXIV, 1932, p. 2

(9) Ruth Benedict, 1934 *ibid.*, p. 86

(10) Ruth Benedict, 1932 *ibid.*, p. 2 こうしたことは、文化の研究においては、ほんの出発点にすぎないとベネディクトは批判する。

(11) ゲシュタルト心理学の基本的な考え方については、Wolfgang Köler, *The Task of Gestalt Psychology*, Princeton Univ. Press, 1969 (田中良久・上村保子訳『ゲシュタルト心理学入門』東大出版会 一九七三年) 等。

(12) ここにニーチェの名が出てこないことは不審に思われるかもしれない。アポロ的—デオニソス的の対比は、よく知られているように『悲劇の誕生』によるからである。しかし、それはこの文脈にはのらない。ベネディクトは、シュベンゲラーからの発想に、ニーチェの内容を盛り込んだの

- 研究ノ一ト
- (1) Ruth Benedict, 1934 New Preface by Margaret Mead p. ix
- (2) Marget Mead(ed.) *An Anthropologist at Work-Writings of Ruth Benedict*, Houghton Mifflin Co., 1959 p. 202
- (3) A. Inkels & D. L. Levinson, "National Character: the Study of Modal Personality" in G. Lindzey & E. Aronson(eds.) *The Handbook of Social Psychology*, Vol. 4 2nd edition, Addison Wesley, 1968, p. 419
- (4) Ruth Benedict, 1934 *ibid.*, New Preface by Margaret Mead pp. vii-xii
- (5) 南博「社会心理学の立場から」『民族学研究』Vol. xiv-4 一九五〇年 九頁。
- (6) 祖父江孝男「文化類型」『文化の心理』中山書店 一九五九年 八五頁。なおフエントロ文化の異なった民族誌的事実の指摘は Dorothy Egan, "The General Problem of Hopi Adjustment", *American Anthropologist*, Vol. 47, 1945, pp. 516—39 参。
- (7) E. B. Tylor, *Primitive Culture*, Brentano, 1873 (比屋根安定訳『原始文化』誠信書房 一九六二年 一頁)。
- (8) Melford E. Spiro, "Culture and Personality—The Natural History of False Dichotomy", *Psychiatry*, Vol. 14, Feb. 1951, pp. 22—31
- (9) A. L. Lindesmith & A. L. Strauss, "A Critique of Culture-Personality Writings", *American Sociological Review*, Vol. 15 No. 5, 1950, pp. 578—600
- (10) 浜口恵俊「心理人類学の構想」『季刊人類学』3—2, 一九七一年 一一五—一四四頁。
- (11) W. W. Lambert & W. E. Lambert, *Social Psychology*, Prentice-Hall Inc. (末永俊郎訳『社会心理学』岩波書店 一九六六年 一七五頁)。
- (一橋大学大学院博士課程)